2018年2月26日(月)　産経新聞

「KATARIBE」を世界へ

南三陸でシンポ 防災議論

〈宮城〉東日本大震災の発生から3月で7年を迎えるのを前に、各地の語り部たちが活動を報告、今後の課題を共有しようと、南三陸町で「全国被災地語り部シンポジウム in東北」が25日、開かれた。3回目の今年は、震災の経験や震災遺構を、今後どう国内外へ伝えていくかがテーマ。阪神淡路大震災や熊本地震の被災地で活動する語り部や、外国人研究者、学生・生徒らが参加し、未来の防災について議論を深めた。

（千葉元、写真も）

震災遺構の高野会館屋上で、語り部の英語ガイドを聞く外国人の参加者ら　＝25日、南三陸町

シンポジウムは26日まで2日間の日程で、会場は「語り部バス」の活動など震災を風化させないとの取り組みが評価され、昨年「ジャパン・ツーリズム・アワード」の大賞を受賞した南三陸ホテル観洋。

初日の25日は開会を前に戸倉地区と志津川地区を回る「語り部バス」を運行、外国人参加者向けに英語による案内も行われた。震災遺構の旧結婚式場「高野会館」では、通常は立ち入り禁止となっている内部に参加者が入った。震災発生当時、建物内にいた327人が避難し、全員が助かった屋上も見学した。

本編のシンポジウムは「『KATARIBE（語り部）』を世界へ」と題し、パネルディスカッションでは「普遍性・持続性のある震災伝承と震災遺構」などをテーマに、語り部や、国内外の有識者らが意見を述べた。

シンポジウムで登壇したパネリストら　＝南三陸ホテル観洋

▼真実が一番大切

南三陸消防署の元副署長で、語り部でもある佐藤誠悦さんは「真実を話すことが一番大切なこと」とした上で、多くの人が語り部の話を聞きに来ることで「交流人口が増えることは地域の活力になる」と期待した。

岩手県の宮古観光文化交流協会の学ぶ防災ガイド、元田久美子さんは、被災した「たろう観光ホテル」を紹介する際、6階で撮影した津波の映像を6階で見せていることから、見学に来る高齢者のために「エレベーターを作ってほしい」と行政側に要望。さらに語り部の高齢化が進んでいることも指摘、「経験していない人が語り継ぐ難しさもある」と話した。

熊本県の益城だいすきプロジェクト、吉村静代代表理事は「語り部ネットワーク」を構築する必要性をあげた。「震災は0歳児から100歳までが体験している。多様な人が参加できる体勢ができたらいい」

▼外国語で対応を

外国人の参加者からは、外国語による情報発信のあり方に関する意見が相次いだ。上智大比較文化研究所のフラビア・フルコ客員研究員は、東北を訪れる外国人観光客数が増えていることから、「外国語で対応できる語り部を増やし、海外の被災地とつながることが大切」と語った。

震災直後から被災地で取材を続ける日本外国特派員協会のメリー・コーベット理事は、「東北はパワフルなメッセージを発している。『語り部』も英語にしていける」と期待した。

その後の分科会では小学・高校の生徒らが各自の取り組みや震災伝承への思いを語った。

南三陸町立入谷小4年の佐藤光莉さん(10)は「またいつ災害が起きるか分からない。物の備え、家族会議などの家族の備え、心の備えの大切さを未来に伝えていきたい」、同志津川小5年の佐藤ひま里さん(11)は「震災を経験したみんな一人一人が語り部だと思う」と話した。